War

“War”

翻訳：平野湧久

I

彼は 24、5 歳にも満たない青年で猫のように緊張していなければ、若さゆえの飾り気もなく品のある様相で馬に跨っていたかもしれない。彼の黒い瞳は、あちらこちらと視線を移し、シギの動きを捉え、小鳥が跳ね回る枝の動きを捕捉し、木々や茂みの通景を常に探り、両脇にある藪の元へ常に視線を戻した。彼は黙々と馬に跨っていたが、遥か西の彼方から聞こえる重砲の音をよそに、まるで目で見るように耳を欹てていた。この音は何時間もの間、単調に彼の耳に轟いていて、その音が途切れると彼はぐっと注意を向けた。彼の手元には仕事があった。鞍の前輪を横切る形で、カービン銃がバランスをとっていた。

彼はあまりに緊張していて、馬の鼻先から爆発的に飛び立った鶉の群れにいくらか驚き、機械的に、即座に手綱を引くとカービン銃を肩に半分ほどかけた。彼は恥ずかしそうに口元を緩め、気を取り直して馬に跨った。彼はすこぶる緊張していたけれど、自分のなすべき仕事に熱心で、拭いきれずにそのまま放置された汗は彼の目をヒリヒリとさせ、彼の鼻を伝って鞍の前橋にはねかかった。騎兵隊の帽子のバンドに新しい汗染みができた。彼が跨っている栗あし毛の馬も同じように濡れていた。風一つなく、苦しいほどに暑い真昼だった。鳥やリスさえも、敢えて日差しに立ち向かうようなことはせず、木陰の避暑地に逃げ込んでいた。

人も馬も落ち葉だらけで、黄色い花粉にまみれていて、樹木の無い場所にあえて身を晒すこともなければそうする義務もなかった。彼らは藪や木々に沿って進んでいて、高台の牧草地にある干上がった森の空き地や裸地を横切るときは、いつも立ち止まって森の外をじっと注視した。彼の道のりは遠回りだったけれど、常に北へと向かっていた。北から見たときに探しているものを最もよく把握できるような気がした。彼は臆病者ではなかったが、彼の持つ勇気は平均的な文明人のそれでしかなく、彼は生きようとしていた。死んでしまわぬように。

見通しの悪い藪の中、小さな丘陵の斜面をカウパス(牛道)に沿って進んでいると、彼は馬を降りて、その馬の牽引を余儀なくされた。小道は西の方へと曲がったが、彼はその道を諦めて、オークに覆われた尾根の頂きを北へと向かった。

その尾根は急勾配の下り坂で途切れた—あまりに急で、彼は枯葉や縺れた蔓の間を滑ったり躓いたりしながら、ジグザクに行き来しつつ斜面を横切り、自分の上に転げ落ちそうになっている馬に注意深く目を配り続けた。汗が流れ、花粉が口や鼻孔にツンと入り込み、一層喉が渇いた。なるべく静かにおりようとしたが、下るのにどうしても物音がしてしまい、彼はしばしば足を止めると乾いた暑さの中で息を切らしながら、下の方から危険を知らせるものがないかと耳を傾けた。

麓で彼が平地に出ると、あまりに木々が生い茂っていて、どこまでが森なのか分らないほどであった。ここでは森の植生も変わり、彼は馬に乗ることができた。山腹の捩じれたオークの代わりに、太い幹の良く茂った真っ直ぐな大木が、湿った肥沃土に生えていた。あちこちに藪があるだけで、容易く避けることができた。一方で、彼は曲がりくねった道で、戦争が牛たちを追い出してしまう前までは放牧が行われていた、公園のような森の空き地に遭遇した。

谷間に降りていくにつれて、彼の歩みは更に速まって、30 分もすると森林開拓地の端にある、古いレールフェンスの所で立ち止まった。彼の道のりは、小川の縁で目印に立つ木々の辺りまで横切ることになるのだが、彼はその開けた場所を好ましく思わなかった。開けているのは、ほんの 4 分の 1 マイルに過ぎないけれど、危険に身を晒すことを思うと気に食わなかった。何十丁ものライフルが、一千丁ものライフルが、小川の傍に潜伏しているかもしれないのだ。

彼は二度試みて、二度ためらってしまった。彼は自分の孤独に青ざめた。西の方から鳴り響く戦争の鼓動が、幾千人もの戦友がいることを告げていたが、ここにあるのは静寂と自分自身と、そして無数の伏兵からの死をもたらす弾丸だけだった。とはいうものの、彼の務めは彼が発見するのを恐れているものを見つけることだった。やがていつかどこかで、反対陣営から来た男たちに遭遇するまで、あるいは彼と同様に偵察をし、彼と同様に接触したことを報告する男たちに出くわすまで進み続けなければならなかった。

気が変わり、森の内側に入り込むと前方をのぞいた。今度は森林開拓地の真ん中に、彼は小さな農家を見た。誰かが生活している気配はなかった。煙突から煙が上っているわけでもなく、内庭を鶏がクックと鳴きながら闊歩しているわけでもなかった。台所の扉は開いたままになっていて、農夫の妻が今にも出てきそうに思えるほどのその黒い開き口を、長い間じっと見つめた。

彼は乾いた唇についた花粉や埃を舐め、彼自身、身も心もこわばらせながら眩い太陽の下へと乗り出した。何も動きはなかった。彼はその家を過ぎてさらに足を進め、川べりの土手にある木々や藪の壁にたどり着いた。一つの考えが、気も狂わんばかりの勢いで頭をよぎった。それは高速の弾丸が、彼の体に衝突したようなものだった。彼は自分が脆く、無防備な気がして、鞍に低くうずくまった。

森の端の木に馬をつなぎ、小川まで 100 ヤードほど小川まで歩いた。川幅は 20 フィートで目に見えてわかるほどの流れもなく、冷たく魅力的で、彼はとても喉が渇いていた。しかし、彼は葉っぱの遮蔽物の中で待っていた。彼は反対側の遮蔽物にじっと目を凝らした。待っている時間に耐えられるように、彼は腰を下ろし、カービン銃を膝の上に置いた。数分が経過すると、彼も少しずつ緊張がほぐれてきた。とうとう、危険はないと判断した。けれども、ちょうど彼が茂みをかき分け、水辺に身をかがめたとき、対岸の茂みの辺りに動きを見てとった。

鳥かもしれない。それでも彼は待った。そしてまた茂みが揺れて、それから茂みが分かれると顔をのぞかせたのだが、それはあまりに唐突で、彼は泣き叫びそうになるほど驚いてしまった。その顔は、数週間

伸ばしっぱなしにされた、生姜色の髭に覆われていた。瞳は青く、目は広く離れていて、疲れて不安げな表情を顔いっぱいに浮かべているにも関わらず、目尻には笑い皺があった。

距離は 20 フィートにも満たないので、何もかも顕微鏡のような鮮明さで見ることができた。ほんの短い時間で何もかも見てとれて、彼はカービン銃を肩にかけ直しながらその顔を見つめた。彼は照準に目をやると、彼が見つめているのは死んだも同然の男であることを知った。これほどの至近距離で外すことは不可能だった。

しかし、彼は撃たなかった。ゆっくりとカービン銃をおろし、じっと見つめた。しっかりと水筒を握った手が目に映り、水筒を満たそうと、生姜色の髭が下がっていった。水がどくどくと流れる音が彼の耳に入った。それから、腕と水筒と生姜色の髭は閉ざされた茂みの後ろへと消えていった。長い時間彼は待ったけれど、喉が渇くと彼はそっと馬の下へと戻り、太陽が燦燦と照らす開拓地を横切って、向こうの森の庇護の下へと入っていった。

II

また別の日、暑く息詰まるほどの日。いくつかの家屋と果樹園を併設した、荒れ果てた大きな農家が、開拓地に立っていた。栗あし毛の馬に跨り、鞍の前橋にカービン銃を渡した、利口そうな黒い瞳の青年が森からやってきた。彼は家に辿り着くと安堵の息を吐いた。季節の初め頃にここで戦闘が起きたことは明らかだった。緑青に錆びついた挿弾子や空の弾薬筒が地面に落ちていて、濡れたままで、馬の蹄によってばらばらに撒き散らされていた。家庭菜園のすぐ近くにあったのは、いくつかの墓で、付け札がなされ、番号が振られていた。勝手口の傍のオークの樹から、ボロボロで雨風に晒された衣服に包まれた二人の男の躰が吊るされていた。顔は萎びて外観を損なっており、人の顔を保てていなかった。栗あし毛の馬は死体の下で、鼻を鳴らして荒い息をしていて、馬に跨る青年は、馬を優しく撫でてなだめると、馬を死体と離れたところにつないだ。

屋内に入ると、荒れ果てた室内が目に入った。窓から敵を偵察するために部屋から部屋と歩いているときに彼は空の弾薬筒を踏みつけた。男たちが野営していたようで、そこら中で寝ていたのか、ある部屋の床の上では、負傷者が寝かされていた所に紛うことなき血痕を目にすることになった。

外では再び、彼は納屋の後ろ辺りに馬を引いて、果樹園へと入っていった。十数本の樹に熟れたりんごがたわわに実っていた。彼はりんごを食べながら、ポケットをいっぱいにした。それからある考えが頭に浮かび、太陽を一瞥すると、野営地に戻る時間を計算した。彼は急いでシャツを脱ぐと、袖を結んで、袋を作った。彼はこの袋にりんごを詰めていった。

彼がちょうど馬に跨りかけたとき、馬が耳を欹てた。青年も同じように耳を欹てると、柔らかい土を踏む蹄の音がかすかに聞こえた。彼は納屋の隅にそっと歩み寄り、外をじっと見つめた。十数人の馬に乗った男たちが、ゆったりと列をなして、開拓地の反対側から近づいてきており、その距離はわずか 100 ヤ

ードほどしか離れていなかった。彼らは納屋までやってきた。馬を降りたものもいれば、鞍に乗ったままの者もいて、滞在時間はそれほど長くないようだった。彼らは協議をしているようだったが、外国の侵略軍の忌まわしき言葉で興奮気味に話をしているのが耳に入った。しかし、待てど暮らせど結論が出ないようだった。彼はカービン銃を荷物入れにしまい、馬に跨って、鞍の前橋にりんごの入ったシャツのバランスを取りつつ、やきもきしながら待っていた。

彼は近づく足音を耳にして、馬に激しく拍車をかけると、馬が驚くような呻き声を上げて、前に飛び出した。彼は納屋の角で侵入者、制服に身を包んだほんの 19 か 20 歳程度の少年が突き飛ばされないように、飛び退くのを見てとった。まさにその瞬間、栗あし毛の馬は進路を急に変えると、納屋の傍に興奮した男たちを垣間見た。何人かは馬から跳ね落とされて、ライフル銃が彼らの肩にかかるのを見えた。彼は勝手口を、日陰に揺れる死体の横を通り抜けて、敵兵を家の正面に回り込ませた。ライフルの銃声が、一発二発と鳴り響いたが、鞍に低く前かがみになり、片手でりんごの入ったシャツの袋を握り、もう片方の手で馬を走らせた。

フェンスの一番上の高さは 4 フィートほどだったが、彼はローン革を熟知していて、何発か銃を浴びせられながら、まっしぐらにフェンスを飛び越えた。森まで直線で 800 ヤードほどあって、栗あし毛の馬はその距離を力強い足取りで駆け抜けていった。その時、敵兵たちはみな発砲していた。敵兵たちは、銃撃をあまりにも立て続けに浴びせていたが、弾丸はあまりに速く、もはや一発一発の銃声が聞き取れぬほどであった。銃弾は彼の帽子を貫いたが、彼はそれに気付かなかった。しかし別の銃弾が、鞍の前橋に置いたりんごを引き裂いたとき、彼はようやく気が付いた。彼は縮み上がり、三発目が低く発砲され、馬の脚と脚の間にある石に当たり跳飛した弾丸が、途方もない虫のようにブンブン、ブンブンと音を立てて宙を舞ったとき、さらに低くかがみこんだ。

弾倉が空になるにつれて、銃撃は弱まり、それから間もなく銃声は聞こえなくなった。青年は得意げな気持ちになった。あの驚くべき一斉射撃の中で、彼は無傷だったのだ。彼は後ろをちらりと見た。そうだ、敵の弾倉は空になったのだ。何人かが再び弾を込めているのが見えた。他の連中は建物の後ろに戻って、馬を走らせた。彼が見たときには、二人が既に馬に跨って、必死になって乗りながら、角を曲がったところに戻ってきた。そしてその瞬間、紛うことなき生姜髭の男が地面に膝をついて、銃を水平に構え、冷淡にロングショットの瞬間を見計らう姿が見えた。

青年は馬に拍車をかけて、かなり低くしゃがみ込み、疾走する中で他の連中の気を逸らすために急に進路を変えた。まだ銃撃はなかった。馬が跳ね上がるたびに、森がぐんと近づいてくる。あとたった 200 ヤードしか離れておらず、銃撃はまだなかった。

そして彼の耳はその音を聞いた。彼は鞍から完全に落ちてゆく長い長い時間の中で、地面に打ち付けられる前に息絶えて、その銃声が彼の聞く最後の音となった。建物からみていた敵兵たちは、青年が馬から落ちて、彼の躰が地面に打ち付けられ、跳ね上がり、彼の周りに転がる赤く色づいたりんごが弾けるのを見た。敵兵たちは予期せず弾けたりんごを笑い、生姜髭の男のロングショットを称えて拍手した。